

町村週報

(町村の購読料は会費)
の中に含まれております)

2949号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 石田直裕：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-47697

<http://www.zck.or.jp>

冬の只見線 (福島県三島町)



もくじ

| | | | | |
|--------|--------|--------|-----------------------|--------|
| 随 想 | 情 報 | 情 報 | フ ォ ー ラ ム | 政 策 |
|--------|--------|--------|-----------------------|--------|

- 過疎化、少子高齢化さらに進むⅡ平成26年度版「過疎対策の現況」……………(2)
- 高野町におけるインバウンドの取り組みⅡ和歌山県高野町……………(6)
- 国政情報……………(10)
- 町村ご当地キャラじまん……………(11)
- 「暮らして自然が輝く交流のまち」
「生涯」快適に暮らせるまちをめざしてⅡ山梨県町村会長・富士川町長 志村 学……………(12)

コラム

もう一度、海に生きる。

民俗研究家 結城 登美雄

東日本大震災から5年。私はこの間、3カ月に一度のペースで岩手・宮城・福島の沿岸集落を訪ね歩き、被災した人々がどのように復興への道を歩もうとしているのかを見つけてきた。3県の海岸線の距離は合わせて1,700kmの長さ。ここに5〜6kmごとに263の漁港があり、そこを拠点に海仕事を

する438の漁業集落がある。その暮らしの場や多くの命が津波によって奪われ、住居はもとより漁船、漁具などすべてが破壊された。人々は当初、「もう二度とここには住みたくない」と海を背を向け拒絶していたが、訪ねるたびに少しずつ変化していった。「海という自然は地獄の苦しみも与えるが、豊かな恵みももたらしてくれる。もう一度、ここで生きよう」。そんな決意を秘めた顔に最近になってたくさん出会うようになってきた。それが被災地5年の歳月ではなかったが、復興とは巨大防潮堤や土盛かさ上げ、高台移転地造成などの土木インフラ整備だけではあ

るまい。悩み苦しみがらも前に進もうとする人々に寄り添い支援することが大切なのではあるまいか。

私にとって漁業者とは農業者と同様、大切な食糧を支えてくれる人々、この思いが強い。しかし食はままならぬ、そして時に危険な自然に働きかけなければ手に入らない。どんなに豊かな海があろうと、そこに向けて船を出し、網を入れて引き上げる漁師がいなければ、私たちの食卓に魚はない。それだけではなく、海を相手のリスクの高い仕事の現場は、高齢化、燃油高、魚価安、後継者不足など様々な課題も多い。それは被災地の漁業だけではなく全国17万漁民が抱える課題とも共通する。被災地漁業の復興は日本漁業の再生のみならず、全国6,000余の漁業集落再生の課題ともつながっている。都市と農村の共生が言われる昨今だが、国民食糧を根底で支える漁業地域と都市の共生、さらには漁業地域間の連携も積極的に推進していく必要があるのではなからうか。

◎写真キャプション◎

福島県会津若松駅から新潟県小出駅を結ぶ「只見線」。奥会津の山間部を縫うように力強く走るローカル線は、全国屈指の景観を持つ秘境路線。豪雪地帯ならではの冬景色や、川霧が立ち込め橋梁を包む幻想的な景色に魅了される。